

源右衛門（げんえもん）窯と資料館

1753 年に開設した源右衛門窯は、260 年以上にわたって手作業で磁器を作り続けてきた。江戸（えど）時代（1603～1867）、源右衛門の陶工たちは共同窯で作品の焼成を行っていたが、1868 年の徳川幕府の崩壊後、1870 年代に藩制度が終了すると、独自の窯と生産設備を現在の場所に建てられるようになった。

源右衛門窯では、午前 8 時～午後 5 時まで工房を見学でき、めったに見ることのできない有田焼の生産工程の内側を垣間見ることができる。職人たちが、200 年以上にわたって磨き上げられてきた伝統技法を用いて磁器を作る様子を眺めることができる。床に座ってろくろを回す陶工や、膝をついて成形している陶工、様々な種類の筆を使って下絵を描く職人がいる。訪れた人は、窯焚きの燃料として使われる赤松の薪の香りにも気付くかもしれない。

窯の近くにある源右衛門古伊万里資料館は 1973 年に開館し、江戸時代に作られた有田焼を六代源右衛門（1928～1989）がコレクションとして集めたものが収蔵されている。これらの作品は古伊万里の名で知られている。六代源右衛門は、1970 年に欧州各地の美術館や窯元を訪れ、有田から輸出されたこれらの作品について学んだほか、欧州の磁器生産の歴史についても学んだ。

資料館の収蔵品の中には、1630～1640 年代に作られた初期の有田焼や、1600 年代後半から 1700 年代初めに欧州に輸出された作品、国内市場向けに作られ欧州の牧歌的風景を描いたテーブルウェア、有田の窯跡から発掘された磁器の破片やその他の文化遺物などがある。